

保護者に「遊び方」を提供することの効果

有 川 一*

Effects of Providing Parents with “How to Play with Their Children”

Hajime ARIKAWA

各務原市の市民講座である「遊びの基地」講座にゼミ活動として取り組む中で、親子で楽しむためのポイントについて検討を繰り返してきた。2014年度の実践から、「工作系のおそび」と「活動系のおそび」を組み合わせることによって親子が一緒に楽しむ傾向が見られたため、2015年度は“保護者が子どもと一緒に遊んでみたくなるような「おそび内容」と「遊び方」の提供”を特に重視して講座の展開を試み、これが親子が関わる機会を増加させる可能性について検討した。その結果、保護者におそびの楽しさと共に「遊び方」を提供することで、子どもが楽しんでいるおそびに参加しやすくなる傾向が見られ、本講座内では親子が関わる機会が増えていった。「遊び方」の提供は、保護者に「子どもとの関わり方」を提供していると考えられるため、それぞれの家庭でも親子が関わる機会が増えるきっかけになることを期待して、今後も活動を継続できれば幸いである。

キーワード：おそび内容、遊び方、保護者、子どもとの関わり方、子育て支援活動

1. 研究目的

地域の子どもの遊び場、遊びの機会の減少が懸念される中、子どもたちにこれらを提供するために、私が担当するゼミでは、2011年度から「各務原市川島ライフデザインセンター前期長期講座『遊びの基地』」を継続的に担当してきた。特に2013年度からは、「親子で楽しむ機会としたい」という参加者からのニーズに応えるために、明確なテーマを掲げて実践を行い、親子で楽しむために必要なポイントについて検討を繰り返してきた。

2013年度は、保護者と子どもが一緒に楽しむ場面を多く導くために、「保護者を子どものおそびに引き込むためのポイント」について検討を行った。そのための内容として、①保護者もわくわくするような普段はできないおそび、②身近な材料を用いて自宅でも親子で再現できるおそび、の2種類を考案し

て講座内で提供した。その結果、特に①の内容に保護者が強く反応し、子どもと一緒にになっておそびを楽しむ姿が見られた。このことから、講座内で親子に提供するおそびとしては、保護者が興味を持つことができ、子どもと楽しさや感動が共有できる内容が有効であることが明らかとなった。

2014年度は、子どもが一生懸命行っている工作に保護者が手を出し過ぎてしまう状況をできるだけ避けるために、「保護者が子どもとじっくりと関わるためのポイント」について検討を行った。その方法として、①時間内に実施するおそびの数を減らすとともに、工作の難易度を少し下げることで時間に余裕をもたせること、②保護者がつい手を出したくなる工作ではなく、それを使って遊ぶ場面で子どもと関わってもらえるように展開方法を工夫すること、の2点を意識して講座を実施した。その結果、保護者が子どもの工作をじっくり「見守る」姿を導くこ

* 短期大学部幼児教育学科

とに繋がり、その後の工作物で遊ぶ場面では、親子が一緒になって楽しむ姿が多く見られた。このことから、保護者に子どもと関わるための「時間的余裕」と「心理的余裕」を提供することと、親子で関わる事ができる場面を工作以外に設定することの有効性が示された（未発表）。

この2014年度の成果の中でも、特に、「工作系のあそび」と「活動系のあそび」を組み合わせることの有効性が感じられた。例えば、親子それぞれが紙ひこうきを作り、これを飛ばして遊ぶ内容では、親子で飛距離を競って楽しむのはもちろんのこと、保護者が持っているフープを狙って子どもが紙ひこうきを飛ばしたり、子どもが飛ばした紙ひこうきを保護者が虫取り網でキャッチしたりと、様々な「遊び方」の紹介を行った。これに従って親子が紙ひこうき飛ばしを行う中で、保護者があそびに夢中になっていく様子が覗えた。このことから、活動系のあそびの中で「こんなふうにも子どもと一緒に遊んでみましょう！」といった「遊び方」を提供することは、保護者に「子どもとの関わり方」を提案していることとほぼ同じ意味を持っているのではないかと考えられた。つまり、「遊び方」を保護者に提供することで、本講座内での親子が関わる機会が増えるとともに、本講座での関わりがきっかけとなって、本講座以外においてもそれが増加する可能性が考えられた。

そこで、2015年度の活動では、“保護者が子どもと一緒に遊んでみたくなるような「あそび内容」と「遊び方」の提供”を特に重視して講座の展開を試み、講座内および講座外において保護者と子どもが関わる機会が増加する可能性について検討することを目的とした。

2. 方 法

a. 実施した講座について

実施した講座は、平成27年度各務原市川島ライフデザインセンター前期長期講座「遊びの基地」講座であり、2015年5月から12月に6回開催された。開催時間は土曜日の10:00から11:30であり、実施場所は各務原市川島地区にある川島東保育園（現 川島東子ども園）、またはかわしま幼稚園・川島保育園であった。

本講座の参加者は、各務原市の広報誌等に掲載された本講座の募集に対して申し込みを行った3歳から小学校2年生までの子ども47名とその保護者であった。しかし、家庭の都合等で、必ずしも全ての開催日に全ての家族が参加したわけではなかった。

本講座の実施は、短期大学部幼児教育学科2年の子ども家庭支援コース有川ゼミに所属する学生12名が担当し、本学科の2年次の科目である「専門ゼミナール」における地域実践活動として実施した。学生は3つのグループに分かれ、1年次の学びをベースとしながらも新たな発想を加え、それぞれが工夫を凝らしたあそびのブースを展開した。なお、本講座の大まかな方針はゼミ担当教員と川島ライフデザインセンター担当者の打ち合わせにより決定したが、具体的なあそびの内容等に関しては、学生の自由な発想に基づき実施することとした。また、学生が考案したあそび内容および展開方法に対して、ゼミ担当教員から適宜アドバイスをを行った。

b. 実施した内容について

前年度までの成果を踏まえ、保護者をあそびに引き込むために「保護者が普段できないような内容や新たな発見が得られる内容」を基調とし、保護者に時間的・心理的余裕を提供できるようなあそびのブース数（3つ）・工作系のあそびの難易度（低めの難易度）とした。また、特に今回は「活動系のあそび」に重点を置き、親子が関わり合いながら実施できるあそびを考案し、その「遊び方（≡子どもとの関わり方）」を提供することとした。

c. 実施内容の評価について

実施内容の評価は、行動観察による保護者と子どもの関わり方の変化と、各回に実施した「保護者アンケート」と最終回に実施した「最終評価アンケート」の分析に基づいて行った。なお、実施したアンケートにおける満足度は、Visual Analog Scale を用いたパーセンテージによって回答を得た。

3. 結果および考察

a. 行動観察による保護者と子どもの関わり方の分析

2015年度に実施したあそびは表1のとおりである。この中から3つのエピソードを示しながら、「遊び方」の提供による保護者と子どもの関わり方について検討する。

表1 2015年度に実施したあそび内容

<p>第1回目 (5/23 (土))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分だけのオリジナルけん玉をつくらう! ・まっくろくろすけをつくって遊ぼう!!! ・こえをつかってあそぼう!! <p>第2回目 (6/27 (土))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やさいスタンプでうちわをつくらう! ・キャラクターつりをしよう!!! ・水中でたからさがし <p>第3回目 (7/25 (土))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな泡であそぼう!!! ・ぶかぶかボールであそぼう! 	<p>第4回目 (8/8 (土))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親子で対決輪投げあそび! ・ジュースがシャーベット!? ・まんげきようをつくらう! <p>第5回目 (11/28 (土))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・親子でプチ運動会!! ・トンボをつくって飛ばそう! ・ひもをこすって動物の鳴き声を出してみよう! <p>第6回目 (12/5 (土))</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オリジナル楽器でクリスマスソングを演奏しよう! ・サンタクロースを作ろう! ・クリスマスリースをつくらう!!
---	--

自分だけのオリジナルけん玉をつくらう! (工作系のあそび+活動系のあそび) (第1回目に実施) (図1)

自由にデコレーションした紙コップと新聞紙で作ったボールを毛糸でつなぎ、簡単なけん玉を作った。これに加えて、このけん玉の特徴を活かして独自に考案した様々な技を実演し、親子でチャレンジしてもらった。工作については、作り方の説明書を渡した上でその解説を行ったため、親子ともスムーズに製作を行うことができた。技へのチャレンジについては、最初は子どもだけで行っていたが、学生が子どもと一緒にチャレンジし盛り上げていくと、子どもが少しずつ難易度の高い技に取り組むようになっていった。これに伴い、保護者も「ちょっと見てごらん」と少しずつ一緒にチャレンジする姿が見られるようになった。学生にとっても少し難しい技を考案して実演することで、子どもは目を輝かせてチャレンジし、保護者にも興味を持ってもらえることを実感した。この内容に対して保護者からは、「けん玉のブースの学生さんは、すごく子どもを盛り上げてくれて、けん玉のやり方を子どもに合わせて教えてもらえて良かったです。」「子どもたちにわかり

やすく説明してもらえて、作業もスムーズにできました。」との肯定的な感想を得ることができた。



自由にデコレーションした紙コップと新聞紙で作ったボールを毛糸でつなぎ、簡単なけん玉を製作。



学生が独自に考案した様々な技を実演し、親子でチャレンジしてもらった。少し難しい技を考案して実演することで、子どもの目を輝かせてチャレンジする姿が見られ、保護者にも興味を持ってもらえることを実感した。

図1 「自分だけのオリジナルけん玉をつくらう!」活動風景

親子で対決 輪投げあそび! (工作系のあそび+活動系のあそび) (第4回目に実施) (図2)

新聞紙をねじってガムテープで止めるだけのシンプルな輪を作ってもらい、これを使って親子で輪投げをしてもらった。輪投げのルールについてもシンプルなものとし、色水の入ったペットボトルを的として「輪が入ったら色テープを1枚自分の輪に巻いてもらえる」という「ご褒美ルール」を作った。子どもたちはこのルールに興味を持ち、保護者をこのあそびへと促して、何度も輪投げに挑戦して自分の輪を色テープでいっぱいにしていった。自分の頑張った結果が形として残ることが嬉しいようで、保護者や学生たちに自慢する姿が多く見られた。本活動に加わっている学生の1人は幼稚園実習において同様の内容を行ったが、その時よりも子どもたちの上達が早く、より熱中しているように感じられたと述べていた。親子の関わり方を観察していると、親子で対決していく中で、子どもは保護者の投げ方をじっくり観察しており、それを手本としながら上達していく様子が見られた。このことから、今回のあそび内容は、保護者をあそびに引き込むだけでなく、保護者と子どもの関わりを促す効果があったと考えられた。保護者からは、「シンプルでわかりやすく、たくさん楽しめました。」「たくさんシールをもらいたくて、何回も挑戦していました。」「家でもやってみたくて喜んでいました。」との感想があり、活動に満足した様子が覗えた。



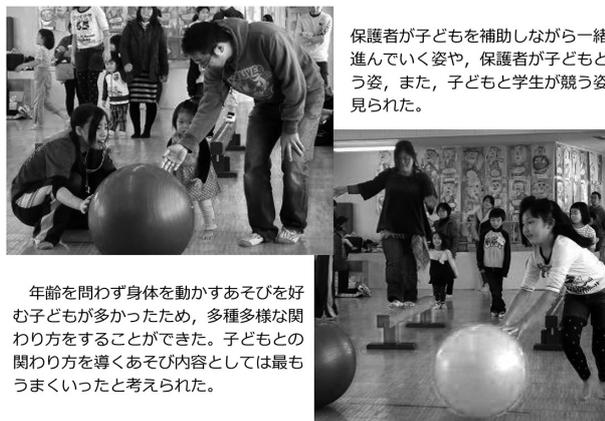
新聞紙をねじってガムテープで止めるだけのシンプルな輪を製作し、これを使って親子で輪投げを実施。

親子で対決していく中で、子どもは保護者の投げ方をじっくり観察して、それを手本としながら上達していく様子が見られた。

図2 「親子で対決 輪投げあそび！」活動風景

親子でプチ運動会！！（活動系のあそび）（第5回目に実施）（図3）

運動会の障害物競走をイメージして、平均台、大玉ころがし、フープくぐり、キャタピラ前進、ジャンプタッチの5種目をサーキット形式で実施し、1周ごとにスタンプカードにスタンプを押す“ご褒美”を準備した。そして、スタンプを4つ集めると、学生の手作りのペンダントをプレゼントすることとした。活動では、保護者が子どもの手をとって平均台を渡る姿や、子どもを抱っこして高いところにあるボールにタッチする姿、また、子どもがころがす大玉と一緒にサポートする姿など、保護者が子どもを補助しながら一緒に進んでいく姿が多く見られた。また、子どもが小学生の場合は、保護者が子どもと競い合う姿が見られ、さらには、子どもたちから学生が指名を受けて、勝負をする場面もあった。2015年度の講座参加者には、年齢を問わず、身体を動かすあそびを好む子どもが多かったため、保護者は子どもの補



保護者が子どもを補助しながら一緒に進んでいく姿や、保護者が子どもと競い合う姿、また、子どもと学生が競う姿見られた。

年齢を問わず身体を動かすあそびを好む子どもが多かったため、多種多様な関わり方をすることができた。子どもとの関わり方を導くあそび内容としては最もうまくいったと考えられた。

図3 「親子でプチ運動会！！」活動風景

助をしたり、子どもとの競争に大忙しの様子だった。この運動会という内容には、子どもの発達過程に応じて多種多様な関わり方をすることができたため、保護者と子どもの関わり方を導くあそび内容としては最もうまくいったと考えられた。

b. 保護者アンケートからの分析

各回の保護者アンケートにおける「子どもと保護者の満足度」の推移を図4に示す。第1回目から第4回目に向けて緩やかな増加を示し、その後、第5回目と第6回目は横ばいの傾向を示した。大きく増加したとは言えないが、例年と比較すると第1回目から高い満足度のまま推移する傾向が見られ、本講座の方針に対して概ね満足が得られたと解釈できた。

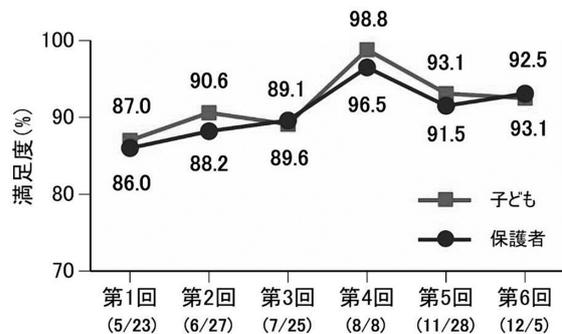


図4 子どもおよび保護者の満足度の推移

各回の保護者アンケートにおける「子どもの満足度」と「保護者の満足度」の推移を示す。この満足度は、Visual Analog Scale (VAS) を用いたパーセンテージによって回答を得た。値は平均値のみ表示。

最終評価アンケートにおける「この講座で、親子で一緒にあそびを楽しむことができたか」の結果を表2に、「この講座以外で、親子で何かを一緒に楽しむ機会が増えたか」の結果を表3に示す。本講座の中で親子で一緒に楽しむことができた割合は68.8%（11家族）であったことから、本講座内では親子で関わりあって楽しむことが概ねできていたと考えられた。一方、本講座以外で親子と一緒に活動する機会が増えた割合は12.5%（2家族）と低く、本講座以外の機会への効果の波及については十分ではなかったと考えられた。

保護者アンケートの自由記述からは、「普段仕事が忙しく子どもになかなか関わる機会がないが、今回色々なあそびを教えてもらう中で関わられたので良かった」という父親からのコメントがあり、普段から子どもに関わる機会が少ない保護者にとっては、

表2 この講座で、親子で一緒にあそびを
楽しむことができたか

	パーセンテージ	
楽しめた	68.8	(11)
ある程度楽しめた	25.0	(4)
どちらとも言えない	6.3	(1)
あまり楽しめなかった	-	(0)
全く楽しめなかった	-	(0)

値はパーセンテージ、カッコ内は実数を示す (n = 16)

表3 この講座以外で、
親子で何かを一緒に楽しむ機会が増えたか

	パーセンテージ	
増えた	12.5	(2)
ある程度増えた	62.5	(10)
どちらとも言えない	25.0	(4)
あまり増えなかった	-	(0)
全く増えなかった	-	(0)

値はパーセンテージ、カッコ内は実数を示す (n = 16)

本講座が子どもと関わるための貴重な機会となっていることが窺えた。また、「家でもやってみたい」というコメントが最も多かったことから、本講座にて「遊び方」を提供したことによって、「あそびを通じた子どもとの関わり方」を保護者に理解してもらえたことが考えられた。

エピソードの分析およびアンケート結果から、保護者に対して「活動系のあそび」の「遊び方」の提供する試みは、講座内にて親子が関わる機会を増やすことに繋がり、子どもと保護者が満足できる内容であったことが考えられた。

親子で一緒に活動するイベントは各地でたくさん開催されているが、子どもは工作が好きのためか、工作系のあそびが中心になっていることが多いように思われる。その一方で、このようなイベントに参加しようとする保護者は母親が多く、その母親は工作系のあそびが苦手なこともある。この場合、保護者は子どもの工作あそびにうまく関わらず、子どもは喜んだけれど保護者はそうでもないという状況が起こり得る。逆に、工作が得意な保護者の場合は、

子どもよりも保護者が工作にのめり込み、保護者は満足したけれど子どもはそうでもないという状況にもなり得る。本研究で取り上げたように、「親子で一緒に活動してあそぶ」という要素を提供する内容に取り込むことで、保護者と子どもが別々に楽しむのではなく、親子が一緒に楽しむ状況が生まれ、楽しさという「価値」を「共有」することが可能になると思われる。そんな機会を提供することこそが、私たちが取り組んでいる子育て支援活動の醍醐味だと考えている。

今回の最終評価アンケート結果から、本講座以外の場面で親子が一緒に活動する機会は十分に増えていなかったが、その原因の一つとしては、保護者の多くが子どもとどのように関わればいいのかを見失っているためではないかと感じている。子どもと一緒に遊ぶことをきっかけとして、保護者が子どもとの関わり方を理解してくれれば、各家庭にて親子が一緒に活動することが多くなるのではないだろうか。そのために、本講座にて「子どもが楽しいと思うあそび」と「その楽しさのポイント」を保護者に伝えていく活動が今後も継続できれば幸いである。

4. 本研究における結果の分析の限界・問題点

本研究は各務原市の市民講座である「遊びの基地講座」に参加した子どもとその保護者を対象としているため、「元々子どもと関わるのが大切だと認識している保護者」を母集団とした研究となっている。また、特に最終評価アンケートの結果は、最終回まで継続して参加した家庭のみを対象とした結果であり、本講座の方針に賛同できずに期間の途中で参加を取りやめた家庭のデータが反映されているわけではない。よって、本研究の結果は、あくまでも「子どもとの関わりを大切にしたい」と考えている家庭が、さらに「保護者と子どもが関わる機会」を増やしていくポイントの一つを提示しているに過ぎないと言える。今後は、本講座のような子育て支援活動へ「子どもと関わることにあまり関心のない家族」の参加を促す方法を探ることが必要になると思われる。

5. まとめ

2015年度の取り組みでは、活動系のあそびに重点を置いて講座を展開した結果、保護者に対して「遊び方」の提供を通じた「子どもとの関わり方」を提供することで、本講座内では「親子が関わる機会」を増加させることができた。また、本講座以外の場面への効果の波及については十分な結果は得られなかったが、「親子が関わる機会」を導く可能性があると考えられた。

私たちが実施しているようなイベント型の子育て支援活動の場合、限られた短い時間の中で親子が関わる機会を多く作り出すことが大切であろう。また、この活動が、それぞれの家庭でも親子が関わる機会が増えるきっかけになることを期待できる。よって、“保護者が子どもと一緒に遊んでみたくなるような「あそび内容」と「遊び方」の提供”は子育て支援活動を発展させる1つのポイントとなると考えられた。

付 記

本研究は、「平成27年度 学生による地域課題解決提案事業（主催：ネットワーク大学コンソーシアム岐阜）」の支援を受けて実施した。

引用文献

- 有川 一, 吉田真己子 (2015). 「各務原市こども基地プロジェクト」における学生による地域活動の成果. 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要, 16: 113-118.
- Wewers ME, Lowe NK (1990). A critical review of visual analogue scales in the measurement of clinical phenomena. *Res Nurs Health*, 13: 227-236.